朝夷巡島記第七編　四

へ13
704
34

文榮堂發兌文房書目

考槃餘事　明李日華　東溪源謙校　白紙摺明朝綴　帙入全部四冊

題畫詩選　圃畸廬門著　全仕立全三冊

書畫哲甘　冥疑氏撰輯　白紙摺明朝綴　帙入全部一冊

題畫詩卿　青川竹惠著　全仕立全一冊

書舗　浪華心齋橋應橋北第五筋　前川源七郎

明治三十六年十月九日購求

朝夷巡島記全傳第七編卷之四

東都　松亭金水編輯

續輯第七

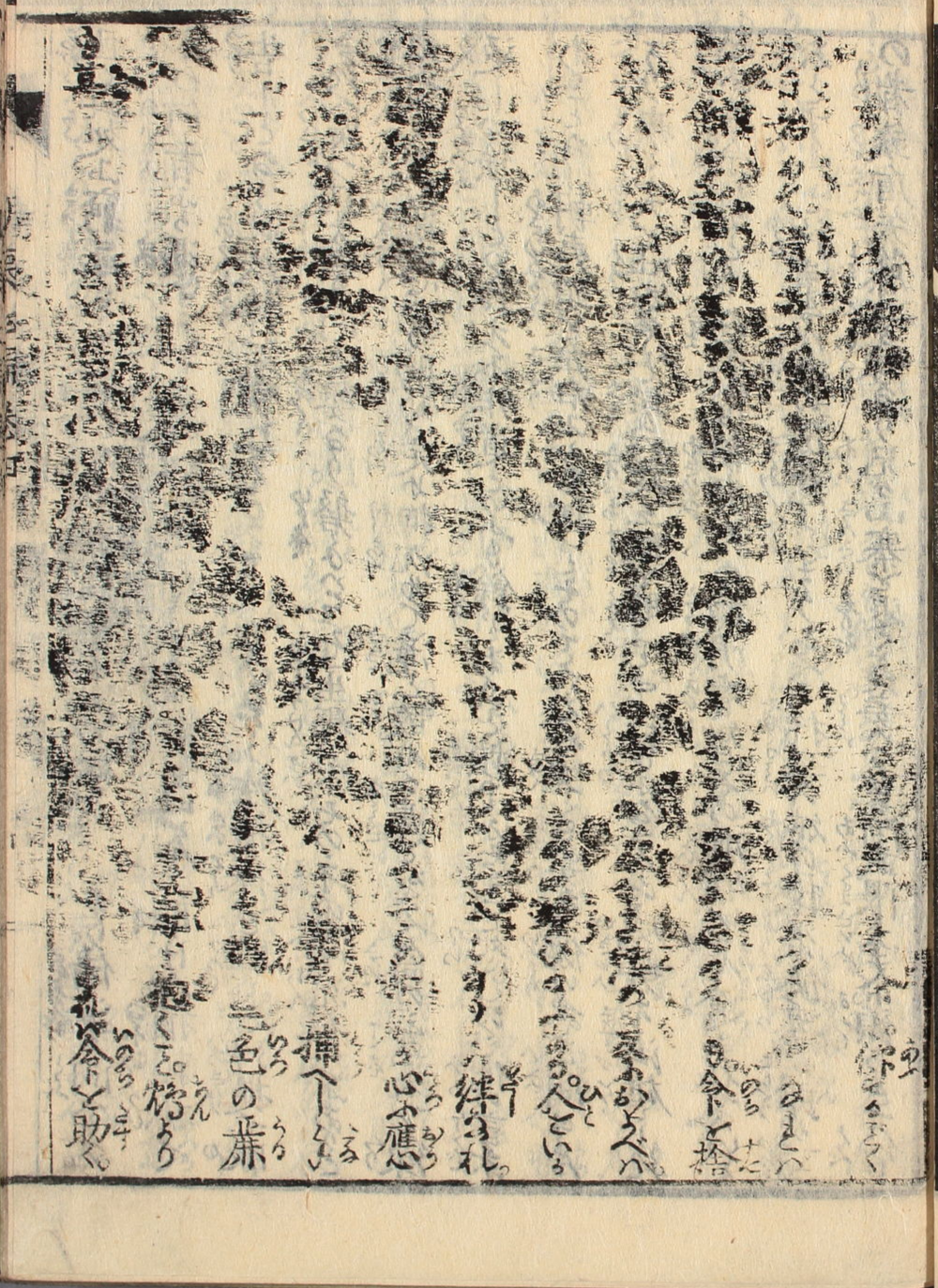
以色操英雄　説道清廉民

往昔志賀寺の上人い碩徳悟道の大智識ふて。年未行ひ澄せ。京極の中息所と。面祝てより心地惑ひ。多年の勤行一時ふ虚空。かの玉鬘帝の歌と詠じて。色の奴とゆりる例ひどさ〳〵人の口碑ふ傳ふ況や朝夷い性質疾肝金腸物ふ動せど。義と重う。命と輕じ。識量尤尋常ふ。酒色と汲てその心と搏ぜ。ぐ。漢土ふれども。あの年いまど三十歳。血氣餘ア。て智慮と覆ふ。元未聖賢ふあ〜ざれば。その惑ひ。ふきと能ふ。當下磐手況熟祝ふ芙蓉の眸丹花の脣。ゆう。ま。鬢の黒髪の顔へかて。〜在ふい朧の月ふ糸柳の風ふ素ふ。ぐ。ゆ。て。えもいえぬ

艶色に宵に逸ふ〜ちるも近倍まさるその面影うち捨がてゝ思ひ醉うがごく
痴なるが如く髪鬢とゝ乱し忽地心をとり収め人木石にあらざれば吾とて情の無
くんや然まども不義にせじと誡て心に折ひしうや義田怒ぎるとも是のゝ
詬ひがゝ頻に往孤往ぎゝが自ら其処へ曳出さんと心強くも嗜みむまゝ怒る
に容を改めて義に勇こゝろに性なるとに平生に学ぶぬまゝ願ども大々こゝ可きぬ
るゝんと未ぬ前〜思ひ量まどされゞとて忍ぶ難き心の駒の狂に隨意に浮
ま来て思ひのゝけを告されゞ猶可きぞく奈何にせん強ていそ然にあれ女子の
身として恥うきゝこゝ浅言出可きまでとてさそその侭に止ぬや快ぬ時いこれ斯と
覚悟ふける妾が身のうへ今更何と惜まんとのゝ探る己首懐よりして把出
抜るもうんせじとれと吾吮と突んとに是こそ朝夷左と伸ゝまづ緊と腕を
押へて頓て顔うち祝ゝ快ぬとゝ思ふ是こそ覚悟究め〜其方の赤心

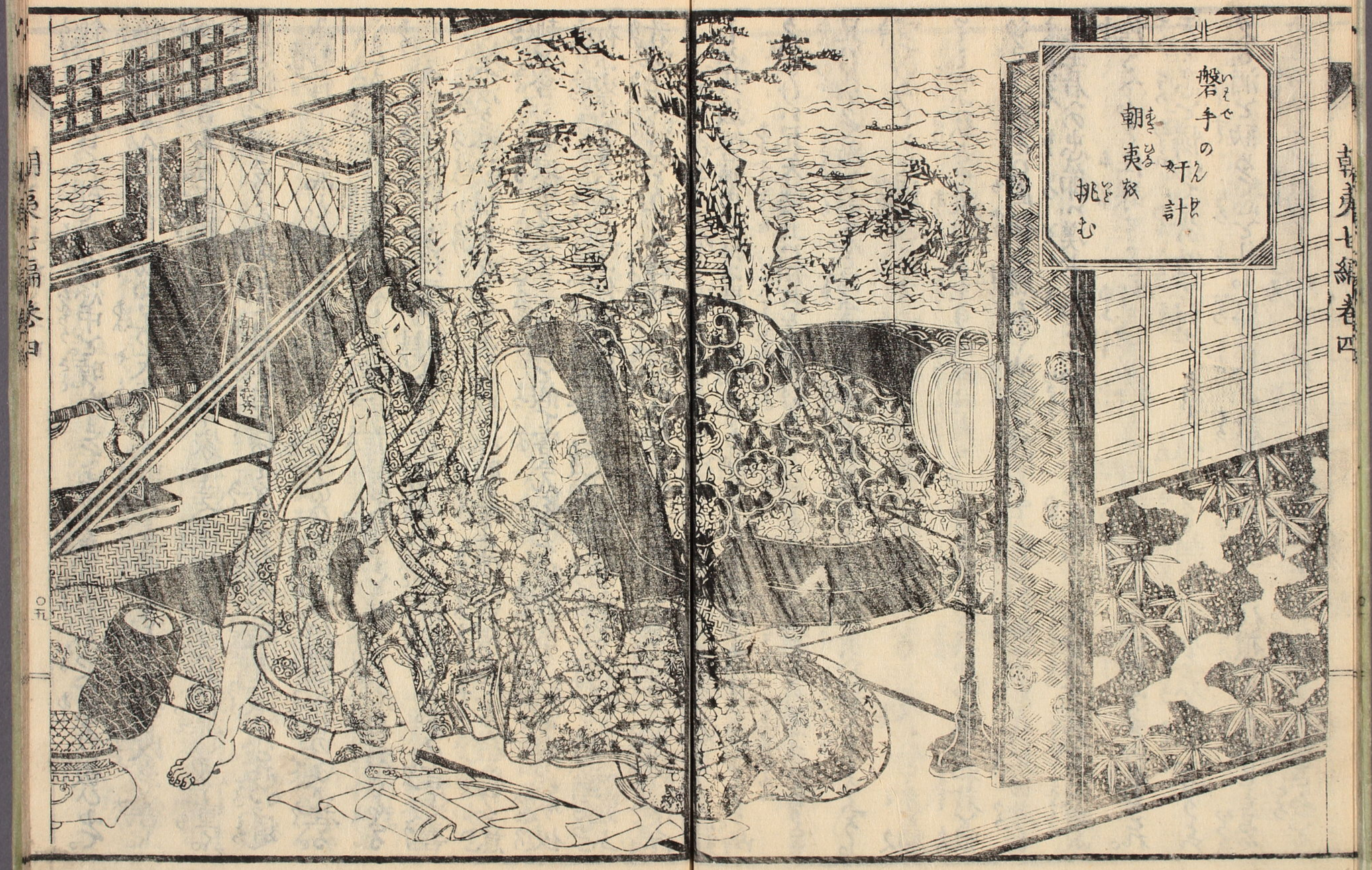
争う仇ふるまでべきや斯るゝ〜に不義の汚名を被るとも何が厭いん其方が願ひ
果さ〜呉んと听て暴に微笑給ふ伏るけまど身を捨て必ひまもまて赤心を汲ひ
ふ猛しきに始めの歌さ引くて夢ゝとのゝそ必ゝて思嫌ひまても猶懲を已が
勝ひとうちつけに言の美き女子ゝるとかゝず褊しゝふよ深き心の真ふて
君と思ふの切るゝ憐まこの人とうち覆ふ袖に出南奇の馥郁と軒の梅が香
春風に国の戸漏て薫ふ斉一笹の朝良朝風ふるびくゞ如く綢繆かまゝ
朝夷やゝ〜ひとさ〜伸べ脊へかけて曳寄ゝ盤ゝが顔とうち戍る。この時怒る
に情原の悦ふて猛しき面持しに頻に笑て媚と献を雲時あり朝夷を
忽地眼と怒らゝて汝深くも謀ゝる色と餌ゆてゝまと繰ゝ心乱れて
正ゝ〜せじ丈と名うて罪に陷さん。その計畧に始めゝ察ゝれどまゞ
その容とうんと思ひ怒る心と押沉ゆて流ゝ〜もるき操言と永く失る姉に腸

沸かくれり。斯いふとても然ることなるまじと。三寸不乱の舌とうて。陳ぜべけまじと五い聽さだいふとりふ世の譬論蓼喰虫の好こと。受のるがゝ是いこれ。常ふ列るうへのことあて。未聞不見の吾と汝。今宵始めて見えうとも。今とうけて初まじふ。恋ひ慕ふべき所謂う。そのうへ汝が面と髪ふ媚と狀じてうまと挑めど。心中ふ殺気残舎こて。言葉の端ふ怒気彰る。あとうそいふ処の実情ゐうぬとうく察しまう。猶ときあても陳ぜるや。若然らんふい彼処ゐる。殊撮棒と食りて。骨も體も微塵ふるさん。宵ふ定めて侍女ゐるが。物語ふも少つゝん。膂力のおど残うんすべしやと。白眼つゆう面魂勇士の相貌ゐゐ〳〵ふ。爭ひがゝうえゝうど。鬱でもうゐ凡者ゐまで。星と行きうその河とうち返さんと心と定めひもうゝぬ疑ひふ。罪も覚えもゐえりのと。詈ゐうふ。既ふ原ひの恢ふい掛替のゐ死命え。捨んとしうる赤心。眼前ふ滴して。駐ゐひしふ行ゐぞや。凡そ害心と抱くもの。人



且く此処ふ窮屈[illegible]倩汝ふ問べくん。
まづ何者ふ憑[illegible]助けん。猶頼れて
告ゞとゐ。此疾棒と喫[illegible]
[illegible]突つけ。まこも問と屡ゐり。磐ひとを生懸命その才の浮沉もてふあり。
必ふ[illegible]ふりて溺惑る胸ゐ定め押流めて滝と散める涙とあさへ尚の云葉を繰
返し心強しとゐ[illegible]ふ。非道とゐふも餘[illegible]あり。と頻ふ[illegible]と怨むのく他の言葉
あるとゐ。朝夷頭と左右ふ[illegible]揮[illegible]そのてくたや少くも要ゐ。偽の老日間とゐん
ゐり。疾く実と吐ぜゆと。髪い逆立眼と睜[illegible]ふ[illegible]威勢ゐ海雄ゐ[illegible]
心ふ[illegible]今いかとく屯ゐる。朝夷めの聰明睿智その肺肝とん透されゐ
ゐとすれど許さん在の隨意ゐ[illegible]ゐ。抑妾の城の棟梁修羅三郎と二
の者鉄肩矢藤五が妹ゐり。兄が山寨と退くと妾ゐある阿武隈大夫ふ頼らもこ

しが。其後磐城の刀称ふ思ゐ。端ゐくも側室とゐて。栄曜ふ月日と送るうち。幽
ふきけば兄矢藤五い。和君が為ふ討ゐと。隠ともあくぬ此処ゐの風ゐ悪人ゐとも
兄い兄いゐ敵と討てんと。ゐふめゐ便と伺ゐ然ゐふ這回陸奥へ和君が下ゐふ。
ゐていゐ[illegible]ゐ便宜と。伺ゐる心地いゐ[illegible]も。甲斐ゐき女子のゐ[illegible]ふ及ぶと身と顧
ゐ。心ふ歎きて在けるが。主ゐる四郎時直め。いゐる青赴ゐ具ふゐくれど。和君と恨
むゐうあとい。酒様ふ賺ゐく油断と計ゐて。一突ふ刺殺せ。されば兄への孝も
ゐ。主君への忠ふ即い。漢士ふ勝ゐる勲功ふて。その後ゐ[illegible]く寵愛厚く。歓楽栄曜ふ
浴ゐべ。ゐく仕課せゐと阿武隈が。渝ゐて頼て匕首ゐき入。遍與ふゐまゐ[illegible]ゐれ。
天ゐが心ど憐ゐて。兄の敵と討せゐるゐん。孫て少く朝夷ゐ[illegible]ふと妾の勇士ゐゐと
ゐ。酒と勧めて心と乱し。色の罠ゐて計ゐん。ふい手ふ一つも仕損ずゐ。ふゐ[illegible]と
ふも。必ひゐて尚のゐく。心ふゐゐ虚言ゐて。鈎んとすゐど石ゐも。堅きふと


磐手のん竹計
朝夷奴挑む

鏁をとりてゆく。却て此方の心中を曉らまてゝの次第ふ及ぶも。ゆへ悪の報ひゆゑ。
雖と恨まんやうもなし。昉め兄の矢藤立が山寨を立退とき。今より心を改め善ふ
交ると言ゐゝ。不良の心猶已を將軍家をさ凌詐りとゆへその罪ゆゑ重く。
首を斬て曝さるゝ。元こゝ自業自得のこと。奚を和君と敵と竊うんとれ拘道
ふ背けり所ゐ。今ゝ兄ゝのひ吾倆ゝのひ俱ふ和君のゆふ拉る。
こゝとも遁れぬ因縁なるべ。いさ速ふ首級て憤ゝを晴しゆゝと自若とゐる
在ゝ。妾子ふ似げる死魂と。朝夷をとゝ感嘆しゝのゆふ死んとゝ。その言と善
といふ汝ゝ挙動健気なり。さるふても怒城時直まゝ彼阿武隈太夫ゆゝいるゝ意
趣と答ゝとゝ取ふも足ざる妾の。ひと假て害さんとゝ。その主意更ふ解まゝゝ今仮
初ふ察すまゝゝ家禄ふ似合ぬ驕奢の分野。非義ゐる方ゝ賄賂と貪ゝ諂ふ
者と尼員ゝ頂ゝとの挿繪の起ゝるゝ。あるゝと正ゐゝき検断使の裁許あゝい

忽地ふ罪あゝるゝんと怨ゝ。かゝる巧とゐるゝ。他の命を断
んとする。悪ふ埒ゝる残忍光頼。這奴ゝ逸ゝ鉄撮棒と喰ゝて骨も肉も醯ふゝさ
ぢんばゝの劈情ふ散ゝがゝ。と歯ゝとゐゝ。忽地ふ莞爾とゝ笑ひ嗚呼吾ゝ
鈍ゝき。渠ゝいゝる故ふゝ計ゝ。夫と知ゝで推量ゝて徒ふ膽と悩ゝと
やゐる。まゝ渠ゝ為体ふ心と着て祝ゝふ若ゝ。然ゝるゝ。正ゐゝき証拠ゐる
ゐるゝ。囲ひゝゝ代ゝ戸ゝ。其処引あけて俟ゝふ。僥倖裡ふ
東西ゐる。これ屋竟と駆ひゝ。その僕其処へ入て頓て蒲團とゝ彼ゝ。
ひまハせゝ寝らゝもせゝ。や東雲ふゐる程近ゝ。四下の動静と俟ふ案ふ差
ゝ白ゝ。夜ハ明方とゐゝふゝ。偖ゐ時直阿武隈大夫。湯島の三人ハ遥の間ふ四
居ゐて今ふ船ゝみゝ音信ゐゝんハゝふせゝやと額とゐゝ。堅唾と呑でまゝゝ。更ふ
便宜と知ゝるゝゝく兎角する間ふ東雲の頃ゝゐれど猶沙汰ゝ。三人ハ頻りふ

呆き果て。驚くほうく心乱れ。渠も恨みを報いんと念凝すゝるれば。仕損ずるとあるべうも。然いまは女子の甲斐なきふ。彼とも利ど乞もき。利きこうも然もなく。その透なくて黙止せり。もの二つの外あり出ず。今安時ぞ侍女と彼処へ遣て動静を窺せうん。然るりゝと点頭あひて。俟て半時斗ふして。夜全く明けもべ。侍女婢女とゝ起し奥院の賓客が目覚めるぐ嗽の水望む。ゆゝ湯もまわらせよ。頓住ずやと寐惚る。婢女どもと急ぎて遥の回廊足音ゑく駈めて。裡のもうと俟うふうや朝夷も床のうふ起来りゐる景勢ゐまい障子と開き其処へ入て。賓客目覚めひしゝ。嗽の水と進らせんとゝ朝夷白敢て頓て持て来ればこうふ。婢女どもいまこ近戻ゝ如此ゝ久べ時直が他ふ汝ら怪しと必ずとこゝなきやと問ゐけらば定ふ心著侍られど怪しと思ふとこゝ。朝夷大人へで一個蒲團の上ふ坐しのひぬと文て心中訝りく思ふ磐くひ朝夷の。其怪力の物語ふ。忍ばを敬て彼処へ往き。子舎ふ潜て居ゐるゝ。嗟ゝ甲斐なきとゐるゝと咳きゐるゝ。駈ひゞ子舎と。呼きそうまど新もゐ。脱ぬしる衣どもの。その侭あまべ往ゐふ。疑ひあり。然いあまと。彼処ふ居らゐを訝しきと。二人今ゐゝ考へてゐ。ふひ当まるとき人ゐ。兎角もるゐふえや朝餉の。出来ゐるゝ程ふ。然いとて四郎時直ゝ衣服と改め朝夷と。舎せ一方へ到まゐ。挨拶ゐて右衣左衣まどいふゐ怪しとおりゝ。爰ふ於ていゐ益不審されれば何とゐ。護身影も思ひ。夫が安否と鬼やあゝん。角やあゝんと案じて。更ふ心も落著き。折ゝ朝餉の膳持出し。朝夷始めち居まば。形のゆくふ今釈して早ふ食仕まふ。その時ふ阿武隈太夫ゝ。敷居の傍ふ立てつきて。昨日鰐と出されゐる甲乙都て十人斗。名簿と捧てまゐ出。彼処ふ控へ居まゝ。如何ふ計らひやんと。いべ朝夷点頭て。今ゐ直ふ彼場所へ到まてひとまず検断をべし。供の

准備とゐすべしと。僕そふ傳えうられとのひ捨て立あぐ。去来舩城氏まうゐん。足下も俱ふ未ぬくといへ時直前ふさち。頃て玄関へち出る。者下あふ集令し人ぞ。こゐ一般ふ礼と做せば。朝夷逸く令釈ゐ。さて夫この訴状を。懐ふして立出るかくてまづ舩城の郡夷志見角谷の三郷の人民且その荘の地頭ゐる誉田池月ゐどゐ徒と。悉く召集令て。訴状の趣きとめて。その旨趣と尋ゆるふ。筒ふ賊首修羅五郎。経任がためふ掠ゆらるて。所持の本ゑを沼ざり処。鎌倉ゆり討ち下て。竟ふ賊ぞゐ誅ふ伏して。國中ぞ事ふ故し。れが元の如くふ領さんと。隣郷ゐ〻〻牒ど合せ。且守護ゐる舩城どのへそのうと訟へて。互ふ傍示の杭と打て。後巣の徴ふゐきんとする時。隣郷のゆその界の。乱まるを。僥倖ふ。土地と掠め奪りんと。毛ふうて斯のごき。紛論ふい及び〻ゆり。原くふ理非明白ふ。先規の如く所務ゐるべ。厚くいありと

何とも同じ。許訟状ふてそのいふ所ゐ。朝夷篤と聴定め。汝達がいふ所ゐ。所甚以て猶まゐり。そもく右幕下の比時ふ。四海の擾乱と鎮めゆるひ。万民暘と稟て太平ふ皆〻。鼓腹して楽むとのいと。後い果して私欲のこあふ。奈まんとと。慕ゐひ。總追補使の職と請て。一国ふ守護とゐきと。郡ふ地頭と置て。その掠奪と誡めゐ。然ゐふ當ふい迄境ふて。且廣大ゐるふゐり。往古も既ふ國府の外ふ。鎮守府と置まてゐり。則其例ふ倣ひて。五郡ふて天の守護ゐり。それぞゐ已ゐふまでゐ。汝達の知ゐ所ゐ〻ん。然ゐふ且修羅五郎ゐ。暴悪ふゐりて侵さるとも。賊徒伐ふ〻ちゐの後い。猶先規ふ須ひて。毛と領さんふ誰ゐまで。掠い奪ふのゐあん。ゐゐると綜の紛まふ。他と掠めて已と倍い。賊ゐるも甚〻。畢竟とま〻ゐの乱雑と。紀さん為の守護地頭。その職ふゐりゐ。治めゐれふ推て知ゐ。苞苴ゐんどの故ゐべ。ゐゐ〻毛いれ。その献ぞゐりの不良ゐて。受る者も不良ゐれ。俱ふ論

ざる所なり。まづ汝達ふ人倫の大道を説くせん。その大道といふる道を所謂仁義禮智信なり。仁とは恵み憐まむといふ。凡そ上に在りては耕さずして食ひ織をして着る。他人の辛苦を貪りて衣食をまたく不仁に似てまど。民の為に害を除き。不良を禁じ善ふ孝き。老を養ひ孤独を恤み。凶歳飢饉いるとも。飢渇の難を免るまとめん。その産業を優ふ。且下の情を察して嫌ふことなきこめもの。その程に楽しむ。世を送ること幾倣さむ。その苦辛且くも休むことなき功あるまでに人ごとに敬ひそび。衣食を献じて労ふ易る。然ふ当時上に在りては。莫大なる俸禄。その身の栄曜の料と思ひ。権威ふ任じて民を虐げ。珍膳ふ飽綾錦を。身ふ纏へども足らりとせず。頻ふ貪るのみふ民まで是ふ貪らるまと。偽を構え巧を競ひて。利を射ると旨とるを。爰ふ於て上下和せず。互ふその虚を候ふと。敵ふ在ごと。ごとと良もまれば仁恵と去て。上り下と衒ふ似

ろ。さて義は則権なり法なり。故ふ罪人を刑罰するも。義を存すとのて不仁とのたび。あべての人の上ふもける。道ふ遺るるのそも。義ふ非ざきば是を取ず。人ふ東西と無え物を受るも。義ふ反て是を做を既ふ這回の論のごと。先規あるを各のまろふおいて知ざるとる。然ると私欲を逞まうあて。人を掠めて吾利せんとす。是不義の才一なる。心ちて心ふ問ばいるふ恥うかざるんそ。義ふ当るや不当やと知るふ是則智といふなり。元来郷黨隣里の交り。互ふ志を厚じて人ふ譲るを礼といふ。まことその心ふ真ありて偽りなくと信といふ。この五ッとうく守ると。誠の人といふべきなり。然ると汝達一ッども。この界ふあるまじて。已と富さんとを計るかく浄論ふ及ぶふ至りて。皆は五常を失なるなり。吾若年の身と成て。聖のまく五常と説い。汝達心ふ烏滸とおもいん。然れども今の人所ふ全く已ゞ言語ふあるまじ。古への賢き人が。教へおるまて。その迹なり。吾若輩を努侮らんを恬そ黙識るべき。

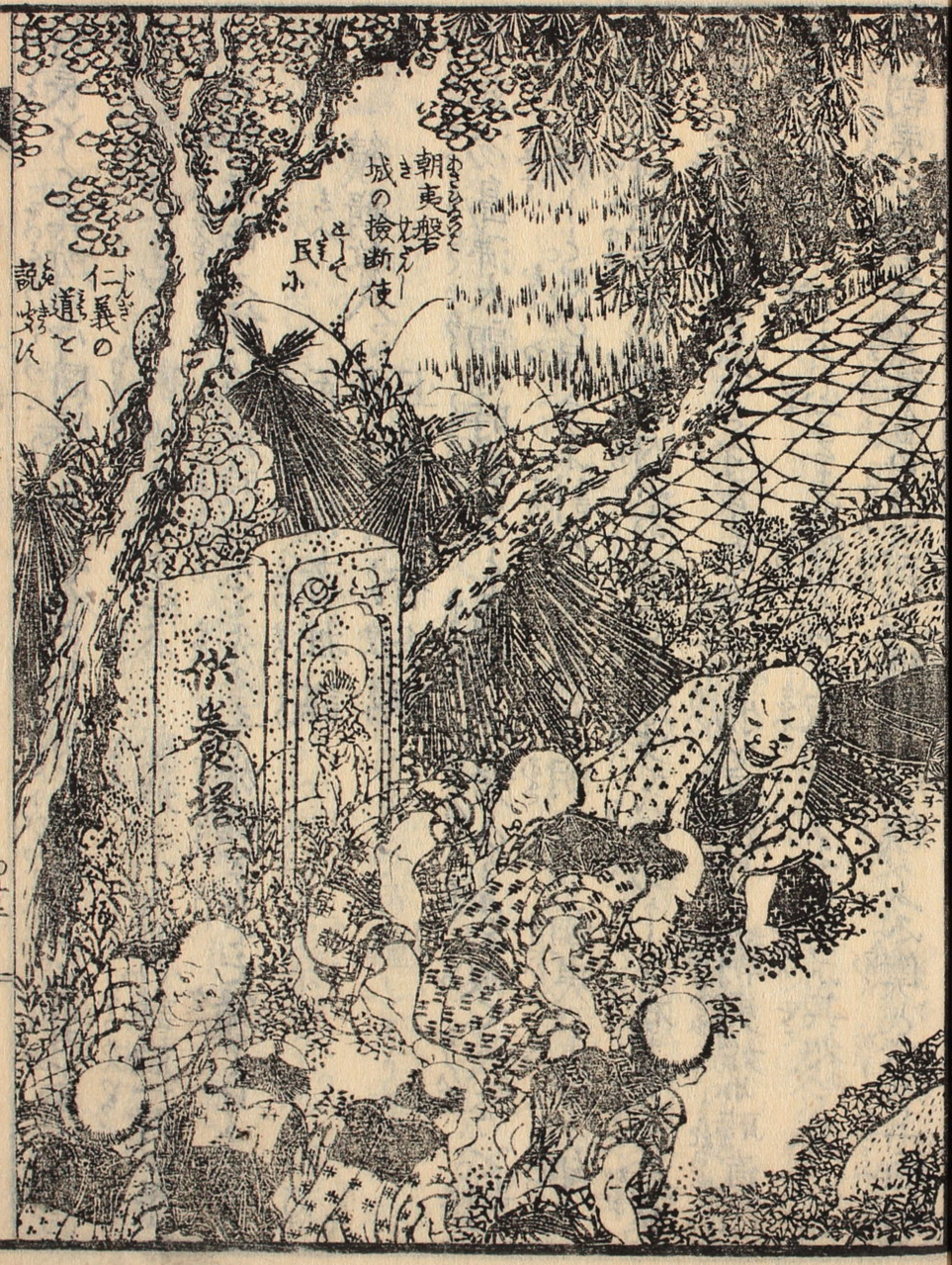
労せずして其の非を知らん。その非を知らば先規とゆて田と領ち畏と正さふ少し
も難きことなし。よく喩さまして。其処なる甲乙口と噤ふ。愛さうしが叢田
池月ども進こそ言はゆ。いふも大人が宜ふ所い人道の大本ゆ。是ふ起こる
こあらじ。今その理解とゆふ及びて。心中忽地ふ冰解せり。つまづく職ふ在なり。
下民と喩ちの智量なり。却て大人が言語とゆて。始めて覚るもいと浅うこ。
と頭と掻く後方なる。村長ども招き。汝達も検断使なる。朝夷大人が
諭言と逐一ふ受つらん。言でものこなる。守護目代などの入りうる筋ふう
尺貝負て。こまと減し彼と増し。理と曲のふのうふ。猶下の浄ひのこ日こ
ふ募りて止時なし。果い闘諍の萌とも。なんとせと吾まづ押へて。検断使と
まづ請ふ他いのとと強ふ愿ひし規模の今彰りて。大人がどき理非明白の。
検断使と下されしまづ汝達が幸ひふしそ。吾こも猶慶べしふ汝達我を

覚りて。その詞ふ従がゆや。但しい他ふ所存ありや。隠まん傾く言ふ。いふ
奈何と問かまば。村長非い躊ふ出まく田夫野人なりとも少しい義理も
辨へとりふ知る近年住べき土地ど。賊ふ押領せまてう。一日も安堵の思ひあず。
な賊既ふ滅びて。数代傳る居屋敷田畠元の如くふあんと思ひの外なる
下知ふて或ひい減し或いまこ良田と上りまこその代ふ年こ水と旱とふ登少なる
瘠地と宛らる。あふ於て戸毎のかてい衣食の料ふ足らず。先規のこくそれ
そまふ割附のくく莫大の。慈悲なりと同ふ。守護の雖へ歎きて。ちの
願ひこば聴入なり。剰さへ上と蔑如むる。烏滸のりのとて咎めまき甚ふきを牢
舎ふ入りうぶさまば甲斐なき農夫なりとも。こと束ねて自滅と俟んや同ト命と
捨らる。守護の館へ押よせて生死と定めんとのふい理ありみなり。斯ていふ
吾こが越度とるんと惶こて。今日まで駐めおきふ。然らふ検断使の下向在

まて。斯の如く宣ふ。天よう佐にのふりのみり。爭ふ遣背まうすべき。嗟嬉〻是
ろい。年老ふ両親及び妻や子供と安らうふ養ふまとの有雑さ。実ふ産土
神ふて在ままそと伏拝むりのさへ多し。朝夷いその容と祝て。守護目代ふ
私ふうと爲するめうふ色ふも出さまで。不肖ふうとが一言と。忽地諾ひ無異ふ復
さへ。吾ふ於ても歎び思ふといひつ後方と視ふて。碧城阿武隈ふふうち
對ひ曰ふ如く在下が。諭ふ依て渠ふ服しめ然まとも渠ふ所持ふ良
田と奪ひて水旱の憂へある田とそまふ換ふ。元来不良の族ふあるまと。守
護目代ふ足下ふが指揮ふ因て所勢ふふうふ。いかや已が東西と思ふや。然
うと今まと改め易てうや。先規ふ復するうとも奪ふまとふ如思ふのいふべて
下愚の常情ふて或ひ已が非と顧ふ遺恨と含む族もいのべまと后来の
爭ひふうべし。喻へていそで盗人ありて。他の東西と把獲るときいかや已が東西

と思へ。本人ふまと取戻そそ。怒ふ恨ふそ仇とふす。とその理分一のふえべ。
支ふの族ふ物と把らしてまで其心と宥むべ。元来非道ふるうのと宥むる法い
あれども。で理と曲てふ事と計ふる。時ふ取ての便術ふるべ。そその族ふ與ふ
べ。米銭い足下ふが積蓄ふる所とりて。節ふ領ち與えらまよ。ある時ハ足下
ふが恵ふ懐きそふの末ふ。永く泰平と致ふべ。凡そ一国と治むるのハ一郡の
民富とりて。已が身の富とす。一郡一郷と治むるのもその理ふ於て変べからし。
いふふその意とはらまつふと。出ひもようの弐ふ。捌きふ簡ふ守護目代ふ。苞
苴と受て私ふする。その金銭と再本人へ返さあんとすふ。阿武隈ふとふ
つふ。物といえんとあらして。碧城へ怜悧漢ふゆて。朝夷心中と粗察するふ。憨
ふ。拒まべ是ふ賄賂の筋見ふまて。渠雑の恐まふと思ふゆて。急ふ阿武隈が
袖ひき止め。その身ふ地進ふ出て仰する処逆一ふ。義ふぬと回答けふふ於て朝夷へ。

朝ひる
ゆうべ


朝夷盤
城の検断使
民ハ
仁義の道と説
伏羲氏

村長そこ其所の帝國帳と出させろ。さて下司と呼集令てその由をさ〜示し。形の如くふそきく〜へ割渡さくさと令下。駑城三十六郷の詳論一時ふ果〜ゐ。朝夷心中ふ歓びつかの時直答ると先ふ立。旅館と仆てゞ帰りけゝ。

續輯第八

再揮佞者拙謀　且勝奸知智舌頭

于茲湯島沸太郎い時逝答ると商議して。磐ゐひと假て戎秀と。剌んとい輙〜と。ゐひ居ゐふ計らんや。その翌の朝ふ至りて朝夷い恙ゐく。却て磐ゐい何地往けん家の内ふあ〜ぞといふと皮て心易ゐ〜ぞ右ゐ左ゐ思ひ苦せゞも。其処へ見つゞ出べき対ゐまぞ。潜て物と思ひけるふ。朝夷始め時直阿武隈その餘の人こゐゐ出さりそ。館のうちも寂やうゐるふそ。密ふ其処と立ち出て。かの朝夷と宿ぞる。奥舎のきへ到りそ。裡のやうと候がふふ。僕と云ゐく一両個ゐち成りそ居ち動静ふ序悪〜と立戻りそ。然ゐふても駑ゐゐ在所。彼処ゐ〜そきと徒へ往べきゐりいあ〜ぬ舌ゐ。ひふもゐて探りそ見んと云ゐと僕答ゐ在ゐきいく〜都合あ〜ゐゐ。こふ駑城の庖厨のこと。賄ゐふ男の貨助ゐ。日未ゐ〜そ心利ゐ。ゐゐ渠ふ心ゐゐて猝て図らばと安〜と腹裡ふ計波て頃ゐ厦助と密ふ招き。耳ふ口傳せ処こふ計らくよとのひゐまゞ。厦助忽地諾ひて。倖ひ昨夜の残の殺でそのまゐふて種こあり。在下ふ計らひてんと丈ゐ暴下男の甲乙と促〜そ。美味珍膳も大かこふ盛ひゐまいこの種こと。齎〜て彼方へゐ。朝夷ゐ出ゐ〜。迹と成ゐる僕ゐもふち對ひて莞尓やゐふ。〻院の留守居〜そ。退屈ふ在ゐゐ。ゐや日中ふも程ちゐけゞば耶敬と調ゐふ。一盞と傾けゐ僕平生ゐ庖厨のこの。閑きまふゐも甘ん。然ゐふ今日刀称ゐ出〜。汚暮ゐ〜でい帰りゐあゞ。ゐ丈まゞ遐近の非番ゐ

身分と一献酌こそ。要時長きとも中ん去来甘きて給べくいひて其処へ押並ぶるとば。僕分い元来ゐる呂。殊ふ元来の折ふれいろ〻歌ふて大方ゐた。舌ちゐて傍へう添ひ。こば食應ふ頂う〻んと。頂て盞と把あげつぞ。頂盃も初めのうち。えや三四分の酔心地ゆい。不覚ふ興と覚えつ。心任せふ飲ゐ〻ふ。主客忽地十分の。酔と發して。多〻の。戯言ゐ〻といひ散し。時移るまで酌うゐ。賀助い猶頻ふ勧め。小さえめでい興ゐと。茶碗ゐどとりて来ては。勧ひるまふ僕ゐもい。嬉しきふかりひて。量ゐもゐまも飲むふうて。泥のて〻ふ酔湯け。ゐの〻肘と枕ゐて。前後もゐ〻まうち伏う。程こそよけまと賀助い。沸太郎ふ如此こう。と告ゐは湯島大ふ歓び。則ちあ〻ふ来ゐて彼方此方と探し〻ゐふ。果して〻ゐる袋戸の。裡ふ何や〻物あり〻。此処ゐんやうと押開く。ふ。磐ゐひゐ足と縛されて。口ふい布ゐて猿轡をけらきて

踏こゐる。湯島ゐむや〻曳出し。様の傍へ抱き来て。猿轡と外し縛の。細紐ゐど成解すて。在あふ酒と茶碗へ次て。まつ一口供ふる。盤ゐい是と飲干ても。渾身亀まう胸まづ疼て。四下と祝ゐの〻言ふは。かて湯島と賀助い。左右ふ〻ちて引起し。ゐと牽て徐こ。まつ渠ら子舎へ伴ひ。湯漬飯ゐと喫ちるふ。漸くふて人心地の。着しやと見るゐどふ。四面の障子と建きりて。湯島い声うち潜め。そその容と尋ふ。婆〻ゐい婆吐息吻き。在しがまと箇様こと。物かうて歎息して。頭とゐふも擡げぬい。面目ゐきゆてあ〻べ〻。推量こて湯島が。ゐん身壮丈ゆてあんゆい。おゐゐき恥〻もいへけまど。元来甲斐ゐき女すの身。仕損じて形のでき。辱めと受ゐるも。失策こいひ〻。猶きと討ふ術も有らん。うし〻心と強めよ。と〻ば怒ゐい頭と擡げ。妾女子の分べりて。勇士と敵と窺ふれば。仕損じてかゐ憂目とゐるも。強ての覚悟ゐまべと。を聊ゐうげくふ

ゐねと。彼人は慮ひの外なる。聰明ふて忽地ふ腹の裡とゝん透され。問ふ処失ゝと。胸ふあゝてゐうくゐは。陳するとも許されゝと思ふふゝて在の次第。逸ゝ明ゝ地ふ言ゐくば。何等の故ゝも分ゞけまゞ。後の穿鑿の種ゐれだと。縛り揚て彼処へ入ゝと。拷責ゝ懸らまゝれば。物いふとゐるゝずゝそれゐ頃死ねゝと思ふてゐ。夫ゝ巳ゞまゐゐも。強面今ゝ存生て。悔ゝきのゝ今ふゐくば。刀称ゐゝの計策ゝ。明ゝ女ゐゞゐゐ。比法ゐゐ牽動ゐりき。然且ゞゐ渡せゐゐ駒ゐ舌ふ及む。然ゐゐ人ゐまゞ骸と埋ゝ。その陰と隠ゝゝ。手ゐまゞ妾ゞ洞と証拠ふ。刀称ゐゝ害心ゐゝとふゐゐ。然ゐゐゝと。頼抵ゐふの証拠とゐゐゝ絶てゐけまゞ。朝夷ゐ術ゐゐゝ。ゐゞゐ牙ゐゐゝ。熟ふ遁ゐ道のゐゝ。上素ゝ殺ゐゝ。ゝと牙と拠伏てゐゝ欺くゝと。湯島佶と共終ゝ。忽地ふ掌と拍て。浮ハ矢藤五ゐ妹ゝ。雄ゝゐき牽動感心せゐ。然ゐゐも長いゝれ。ゝゐの証と

消ゐのゝふゝ。益ゝゐる所ゐゐ。まゝゐん牙ゐも兄の敵眼前ふゐると見捨ゝく。死ゐとゐて本意とするゐゐ。勿論朝夷の惶ゝゐふ因心ゐる刀称の奔事とゝ。明ゝ女ゐゞゐゐ。比法ゐゐ牽動ゐりき。然且ゞゐ渡せゐゐ駒ゐ舌ふ及む。ゞとゝふ。今ゝゐふ何とゐゐん。ゝれば此処ふて死ゐんと思ふ。命と存生ゐの牙ゐゐ。大望ゐ果ゝゐのゝふ。駿城の刀称ふゐ雖ゐゐ。全き計策とゐゝんとす。心のゐゝいゝと。施ゝと。少て強ゝふハ湯島の顔ゐ成ゝて夫れゞの計ゐひゐゞ可惜き。命といゝゞ捨んとゝゞき。開いまゝいゐゐ便術ふゐ。妾ゞ牙ゐ成ゞゝ。教へゐゝ。頃ゝらんと。膝ゐりまれば。沸太郎ハ故意と呵ゝとゐ。笑ひゐの便術種ゝあり。然ゝゐゞゝゐ牙ゐが如く。心弱ゝゝ何とゐ為さん。長い苦肉の謀計ゝゝ。輙く行ふべきふゐ。教へゐゝ。詐るゝゝゐり。死ゐハ死れ命惜ゝハ存生て証ふゐ。自ら笑ひと招きゐゝ。暗ふ励まゐ言ふゐふ。ゝゝ。涙と流

ありて。妾爲ふ[illegible]甲斐なく。大事と滅せ[illegible]科あるべきと如此こと[illegible]ぬれど。今い弥覚悟と究めて。名い亡るのと心い決し[illegible]。願くは[illegible]の為様と示し[illegible]と切ふ請。その面魂女子なれども。思ひ詰る景勢なれば。湯島い点頭でいなく心の決しなば。教ふるゆゑと雖うべき。昨夜い色々と誘ひられど渠うなふその[illegible]を食た。這回いそもと表裡し。尚様こふ計るべ。当下必らも頼抵。昨夜のことを言募ることも。偽りと言消あて。なんなりべきことの。言ひ立なば渠怒ってまもくなんなと言る時ふ時直阿武隈名如此こと。こば渠が威勢忽地ふ摧けるふ然もなくふ。我を張て狂ふうり。若狂ぐその巫と去らせん。研て両段とうさんの。渠何ぞりの術あるとも既ふ[illegible]方多[illegible]なり。殊ふい酒と強飲し。計らばいのを仕損ぜべきいるうや然いあるとうく魂と居るふあるまくふ。克ぐうとき示せば。怒ぐあい具ふ此と異ふ丈ふ。のこいと易り。刀称ふうくくその名笘の差ひぬやうふなんなうふ。語をうくと言ふを。開い此方ふ泥濘いあ。定ふ心ひ謀るべ。と密談時と移もるどふ。秋の日陰のやう傾ふきて。晡時とうりふけり。彼朝夷が留守ふ乗る。下女ふ此項ふやう酔醒て起あぐ。さも貧助ぶ馳走ゆ。びひの外ふ太く酔う。見さとえ日ぶ申刻い過ぬ。刀称ふ程ふ飯ふ[illegible]ん。抔盤とう収めよと云いのぶまどまぐ酔の篤と醒ねば浪こと。院のうちふ散しる。東西と片倚ふどもるふ。外の方暴ふ噪ぐあく。飯ふ[illegible]ふ[illegible]ふ。其処へ駈出る則美秀ふ先ふ立て。こまふひ[illegible]副ふ[illegible]城四郎。阿武隈大夫も後方ふ在て。折うくこるる玄関へ馳出る輩ふ。當所の知縣岩渕作理。芋瀬堂六名と始めて。這回の條ふ加ふ合る。上下の官吏七八人る一容ふ並居う。その労と謝し。且今日。朝夷大人ぶ教諭ふうくうめ。浄倫一時ふ決し。蔡民安堵の思とるまと。五名ふ於ても

この上なき慶びゆえいなびぐ。筒より此館ふ待受くへ心斗の東西と捧て。大人が恵みと謝せん為なり。去来こ此方へ来なくよと。先ふ立ち移ふ城が館のいと廣らなる書院へ誘ひ。まづ上坐へ美秀とぞ居て尊敬もその容さまふ徒支ぬいらんゆるめくこの頃の人心ふい油断なくまぐ。朝夷いとき程ふ今釈て做て今日ハ終日労まるふ彼処へ往て休息なさんと分と側つと作理茶六五ちくてまづ〳〵雲時と推駐め果敢けまとの捧物と今奉る所なり。這ハ在下弟ぐ寸志なるとと。注めらまてハ強ふ固く辞するの尼都の人ゆきて善めつむぞと思ひて未坐ふ復ると弁一小性童と始めて。阿武隈なるとの奔走して。持来る珍膳美味所せきまを並べり。朝夷いまとうて。這ハ殊こしき地走なる。在下酒ハ嗜めども。酒菜ハ常ふ三種の東西とのと足さらん海濱ふ程近くるぬふかく鮮けき魚どもと霧ゆるふを入力とぞ。在下ふ費を所為なるべ。却て心ふ快〳〵と苦笑ひもる當下ふ四郎時直ハ衣服なども著更てもく出来りて大人よ然のこる言ゆひそ這ハ知縣ぐが志と表もまを少ていなる。辞こるふ本意なるらん去来こ献酌なくと已まづ酒杯と把あげて朝夷が前ふ居て勧むるやどふ美秀なるふ固辞なくて杯とうけまを。後て儲の侍女ぐ粧ひ装まて前後ふ立ち酒菜と挾こ折敷ふ載ふて一個ここの前ふかくこふ於てかの作理茶六ハ前ふ進こ自ら酌とうて朝夷ちよび。駒城阿武隈ふ進めり。かくて程なく暮ふ及べ例の銀燭と點一列ねて。酔飲時と後すまふ戌剋とゆ覚ゆる頃傍の隔紙塊と開き蕭然ゆ。もて出る人あり。這ハ誰なるんと一座の人。見るふ是なん磐城の愛妾。駒ふい髪とふり乱。紅粉とぞふ粧ひねび色青ざめて十分ふ憂と含みー景勢ふ驚こと衝立ち。人こあまと祝て怪しむ所ふ阿武隈佶と祝て声と励ち。汝淫婦何

方へ往る。昨夕朝夷刀称と歓待て。この後い弗ふ居らん。館の隈ゝ求め飽倦渠定ふ密夫ありて。今霄賓客のこの紛まふ走ア一ゆん然いあれ怒城の刀称ゆい汝といひ。吾も平生ゝ鵠恩とうけゐるとも顧らん浮不良の挙動ゆて。この後何の顔ありて人ふ面ハ合せんとう浮ふ長き秋の夜と間睡ともゆりしで。何方へ往て今まで居ゐる。まさ其上ふ賓客と歓待席へ案内もゆきで。枕ふ乱ゆて寐ゆて髪と。把揚もせで臆もせで出ゆい烏滸の挙動ゆり。頓ゝ下き疾ゆりむやゝと。朝夷怒城と尻目ふうけて。一多高く言まび岩渕芋瀬と始めゆ。興醒自ふ瞻望てゆ。當下怒いひい徐ゝと城がをへ坐とゆて。阿武隈大夫とゆ人ゆ。綽釈ゆらゆわ。然宜ふ乎理ゆいあゝれどこまふ容子のゆきとゆい妾陋ゆき賤女の節操後ゆ浅いあゝをとゆ。かくまで深き思とうけ。何と不足ふ異夫で重ねて身とや

匿まべき。とゆありいそで猶疑ゆいまん。さゆと昨夜ゆうの一始終。明ゝ地ふいそでこの席ふ面伏ゆる人まゆゆるべく。いそでとすれば已が身の証明と云ゆふもゆけまべ果ゆまをまゆし侍ゆゆん。その仔細ハ他ゆゆ。朝夷大人い縁会ゆう。此使のゝゆれば敬ひ冊き奉ア。努ゝ疎略あゆゆまを。と主の刀称のゝれゆ。今畏ゝ酒宴の席の果て卧房へ入らまゆゆう。侍女どもふゆわ任ゆい後ゆき條ふもあゝん気と思ふふゆりて子舎と出。彼処へ到ア日中の程召されゝ衣の前後も心着んと叅アゆふゆ。侍女ゆい其処と退き。朝夷大人い卧房ふあり。妾ゆ往ゝと僥倖ふ咤狂めてこの頃の長途ふ足と太く病ア。腰と捻ゆゆて。ゝゝせんやと宣ふゝふ否む術ゆ。傍へ倚て脚ゆゆと搔摩ア。系らする。この折忽地起上ア。腰捻ゆてゝい當座の計略。実い汝ふ聞の伽とゆさせんとその為ゆゆる。去未ゝとゆと横陳ゝて。旅中の憂と晴させよと云ひも

朝倉七綱巻四
計策を授けて
磐手再び
朝夷を
誓ふ
あよ
いとで
いも田
いとで

うけ丸雑題ふ。嗟やと胸い噪げども。十四十五の處女の如く。その侭逃んもうゐ
ゐり。然いとて深く慙あるべ。怒をなんとても恐まじ。右左回答も口隱り
う。その意ふ従ゲめべきゐ〜ねべ。ゑと逡巡てその仰いと有難く侍まども。
妾ハ既ふ懸城めふ恩と稟ゑ者ゆて。その口詞ふい順ひゲて。努こ君を
嫌ふふあゐれとのとの〜ハ仁許と。願ひまゐっとゆくども許さば仁王の如き腕突
出して。妾が袂と緊と掴へ汝あゐぞや吾いこまじ此陸奥でも鬼神と武勇を
称へらまて才ゐり。まと鎌倉ふ誰むらふ和田義盛の三男ゆて権貴も惶ぬ
英雄と。人も誉吾も誇ふ。されど思案の也とらハ。汝が色香と愛想ひ既ふ
泄せ一言と仇ふるすーも為せんや。緩令磐城の側室いのゐ。実の渾家ふあり
とても。想ひ詰る一念を翻ゲまべき吾ゐ〜ぞ。時の権威と勇力と。鼻ふ
挂る面憎さふ。振きゐんとハ思へども。羅綾の袂と切とかく。七尺の屏風躍

ゐふゐゐく。猶躊躇てあるゐどふ力ふ任一引傍て。辱をめんとしゐハ故今い
辞するふ所ゐく。不虞の備へふ平生さより。収むる所の懐劍と。早く抜んと
ゐゐりしと。見さへ敢ゐく扱さゐと。女ふ似げゐき又物三昧さまふい深き故縁
あゐん疾言りと責られても固ゐ巧めるてふもゐ〜ねべ何といふべき詞もゐく。
弱ゐ果ゐる細の魚のごと交野の片鶉夫や恋一と思ふのゐ朝夜大人を
怒ゐふ沼塢も在ゐふ縄ゆて回ゐと胸さへ苦さへ搖まつ。袋戸の戸とかー
閑て中へ突いまと剰さへ薇書まで挂らまて。物いふてもゐ〜柴の葉末の露
と命さへ消も入ゐん思ひゆて。夜ハ明れど許されを。検断ふとて出往ゐふ
逆ふい下僕西三個夫ゐゐふ来まさへ附らまされば辛ゐじて追と出べ〜ゐ
もゐく半死しゐる思ひの折〜。外の番人の下僕ゐるがや酒嚥と催しの。後ふ各
爛醉して前後もゐず伏ゐん。願ふてもゐき僥倖と。足の先ゆて袋戸曳

あけ。まづ其塲とび逝まるべくも。渾身痿痺て動かるべき故ふ皆くて子舎ふ潛こ稍人心地着をふちり。いそぐその俤止るんとあく奈アそ侍るゐり。貴る人の善らぬうと。言をらいとも烏滸る所為ゆそ後の崇アもいうならんと心痛めて侍まども。で才の証とるさふ在の隨意と言すゐる。其処ふ在まる朝夷大人も悪くるゆ把てのひそと真偽うり文て満坐の中ふて泣つ笑ひつ。言えらまて朝夷い持ゐ盞磯と投捨眼を睜アて駑ふの方とうち白眼て声と荒らげいふも仔細の不審ーけまとば。後ふ搦て袋戸へうち篭ゐん実ふ然ゐり。その餘い汝らいふ所。金表裡ゐる食言ゆそ言と巧こふ吾をそ。猶不爰の徒ふるさんとる。その謀畧い誰教しぞ。まづ時直め阿武隈大夫い別く逐一聴ゆくその餘の人もその事ふ映しるや否いちゐねど一座の不肖ふ猶聴べーゐれ一件いふをあり。昨夜人定の頃ふ及び。媚婦来つてうまと挑む。その情頗る虚言ゐれい。假ふ惑へう面持して。猶その容を窺ふふ果して匿せる匕首故ゐそあまと責問ふふいうゐる條ゐ主人時直阿武隈ゐ謀計と吾ふ教へて刺客とうゐぬと綽冴く地ふ首伏せり。加之夫ゐる媚婦い先ふ亡べー鉄肩矢藤五。重連ゐ妹ゆそ。吾と敵と褒ふう。具ふいひーい偽ゐ〜ず。斗い公の道理とちゐそ怨むまづき者と恨む。匹婦の一念許ーもすべ。許がて解ーづ〜ゐい。足下ゐ何の趣意とゆそ。吾と婦女子のゆと假て害さんとい做ーうゐそ。心ひづゐれ挙動ゐり。斯詰らい然ゐてい。決して非そと陳ずべけまとい。媚婦い慥の証人と。傳ゆおきを下僕ゐ。解ゐりして逃しゐれど。猶懲ゆまふ陷まんとおく来ゐ夏虫の火影ふ今棄ゐ来ゐ挙動ふ髪方髪弗ゐり。将来その次才と兼ゐ〜んと。問詰らまても時直い。尚ふ湯島

と密談して。思ひ儲けしことなれば。些も胯まぢを呵ること。冷こと笑ひて童兒どもら。喧嘩どもの言とりて。詰ることのよそ笑止なる。吾こいふ懦なりとも。足下ふ太き怨ありて。害さんことを欲まるるなり。爭甲斐なき女ふ託さん。鬼神ふもあるを梵天王の再来なりとも一個の人なり。吾ことても壮夫なる。必死と究めば何とか怖ぢん。然ふあるまじや朝夷大人漫ふ些の言をふと設けて威して入口と閉ぢんと。討らるとり酒臭の戯事。ゆ流してよと宣ふこと。天晴直なる氣象いとえて。特毋敷こといふとと。冷こ笑へば朝夷い。聽ふ汐堪ぢ膝こそ歪し。蘄と做してを居けり

朝夷巡島記全傳第七編巻之四畢

頼山陽先生著

續日本朝戰畧篇　全五冊

世言正編ノ世ニ行ハルヽ久シク且ツ盛ナリ而シテ其近世ノ戰略ニ於テハ既ニ一巻ヲ割キ紙數充ツ以テ記スル能ハス故ニ今般先生ニ乞ヒ續編ヲ發兌スル所ニシテ其記載スルヤ文化年間晉西亞人蝦夷地ニ入寇スル ニ始マリ 往來大和長防又西東戰ヒ王師東征尋ヲ佐賀台灣ノ諸役及ビ朝鮮江華島ノ捷ニ終リ其中大小諸戰智將勇士ノ奇勲偉功ヲ洩スヿ無シ即チ兵家必讀ノ書タルヿ言ヲ俟タス今日開明文化由テ興ル所以スル者マタ戰ヒニ出レバ人ノ尊卑ヲ問ハス有志者ハ此書ヲ閲セサル可カラス四海君子幸ヒ購求テ其奇書タルヲ知リ給ヘト云フ

一大坂書肆

右書各府縣下普ク書林ヘ輸出有之候間御寄ニテ御購求下サレ度候

文榮堂　前川源七郎謹白